

唐丹の民話・13話「片川地区」

# 先祖を敬い



禁じた 門松



平成19年3月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

## 目 次

### —先祖を敬い禁じた門松—

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 尾形家の先祖	4
2. 3人の分散は、生活の知恵	4
3. いたわり合う兄弟愛	5
4. 上方の華やかさに、心ひかれて……	5
5. 先祖から受けた罰として	5
6. 7本の枝を生やした不思議な杉の木 (参考)	6

## 唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関りかつ再話できるものを選び、その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」「読みやすく」「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入し、できるだけ関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹にもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に想いをはせる一助になれば幸いです。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツさんの「民話を伝承したい」と言うこの熱意と努力に敬意を表するとともに、故人とられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「先祖を敬い禁じた門松」は、釜石民話第1集「お正月のならわし」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

尾形家の祖先は、700年位前に石川県方面から落ち人として、何人かの人々と来たのですが、一部の人は、宮城県に住み着き、尾形三兄弟は都落ちの時に、京都の石清水八幡宮の護符を頂き、海の近い村に住みたいと唐丹にきました。

三兄弟の上の兄は唐丹の山谷で山の狩猟が出来るように、中の兄は川目に田畑が耕作出来るように、下の弟は海で漁が出来るようにとそれぞれが別れた。

また、わずかしかなかったお金を等分して貧しさと戦いながら生活をはじめました。

ところが、唐丹に来て最初のお正月を迎えましたが、門松を立てることも出来ずやっとな餅が食べられる生活でした。

上の兄は弟達を案じて「どうだ、お正月は迎えられるか」と問うものでした。こうして兄弟を思ういたわりの心と助け合いの暮らしが続いたそうです。

そこで、尾形家では先祖の苦労を忘れないためにも、門松は立てないことに

しましたが、子孫の一人がお伊勢参りに行き、上方のはなやかな、お正月を見て帰り門松を立てて祝いました。ところが主人が薪わりをしている時に、誤ってまさかりで、足の親指を切ってしまったのです。

これは先祖から罰を受けたことに気づきそれからは、尾形家ではぜったいに門松を立てないことにしているということです。

石清水八幡宮の、御札今もって家の守り神として祈ってあるということです。

尾形伝五郎さん

## 先祖を敬い禁じた門松

### 1. 尾形家の祖先

尾形家の先祖は、700年位前に石川県の方から落ち人として、何人かの人たちと都をあとにしました。

一部の人たちは、宮城県に住み着きましたが、尾形家の兄と妹と弟の三人は海の近い村に住みたいと唐丹に来ました。



(京都の石清水八幡宮)

兄と妹と弟の三人は、都落ちの途中、京都の石清水八幡宮に立ち寄り、お参りして、これからの事をお願いしました。

その時にお札を頂き、守り神として、それぞれの家で祀ることにしました。

### 2. 3人の分散は、生活の知恵

長男は、「山で狩りが出来るように」と山谷に住み、次男は、「海で漁が出来るように」と片岸に住み、3人の間の妹は女だからと、兄と弟の中間の地で「田や畑を耕せるように」と川目に住み着きました。

わずかしかなかったお金を3等分にして、石清水八幡宮のお札をそれぞれの守り神とし、貧しさで戦いながら生活を始めました。



### 3. いたわり合う兄弟愛

唐丹に来て、初めてのお正月を迎えました。貧しくて、門松を立てることも出来ず、餅がやっとな食べられる生活でした。

兄は妹と弟を案じては「どうだ、お正月は迎えられるか」と問い。妹と弟は「兄さんは、どう？」と心配しあうものでした。

こうして、兄と妹と弟がお互いに思い合い、いたわりの心と助け合いの暮らしが続きました。



### 4. 上方の華やかさに、心ひかれて・・・

尾形家では、先祖のいきさつや苦勞を忘れないためにも、門松を立てないことにしていました。



兄弟たちが、それぞれ頑張ったお陰で、ある程度の余裕もできました。

しばらくして、子孫の一人が、お伊勢参りに行き、門松やお飾りをつける、上方の華やかなお正月を見て、感激して帰ってきました。

つぎの年、尾形家でも、初めて、門松を立てて正月のお祝をしました。

### 5. 先祖から受けた罰として

正月も終わったある日のこと、この家の主人が薪割をしていて、誤って“まさかり”で足の親指を切ってしまいました。

何年となく、この事をやってきて、こんな事はなかった……。不思議だ……。

これは、先祖から受けた罰だと思い、それからの尾形家(屋号=つろ)では、絶対に門松を立てない「ならわし」にしました。

石清水八幡宮のお札は、家の守り神として、今でも祀っています。



(尾形家の氏神様・京都石清水八幡宮)

どんとはれ

## 6. 7本の枝を生やした不思議な杉の木 (参考)

尾形家の氏神様には、神木の杉が茂っています。そのうちの一本の杉に、7本の枝が生え、真直ぐに見事に伸びました。

その枝が農具に手ごろだと、先ず一本を伐ったところ、やはり足を怪我をしてしまったと言ことです。

これも、何かの祟りではないかと思ひ、その後は、伐らずにそのままにしてあるとの事です。



(尾形家氏神様前の鳥居)



(鳥居に向かって左奥の不思議な杉)

(参考の項) おしまい

◎釜石の民話・第2集：お正月のならわし

○話 し 手：尾形伝五郎さん／川目

○聴 き 手：加藤ムツさん / 片岸

●再話著者：上村年恵／片川地区 (唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ)

●写真撮影者：上村年恵／同上

●校正指導者：新沼 裕／本郷地区 (唐丹愛ちゃんネットパソコンクラブ)

●再話完成：平成19年3月